



卒業を祝して

歯学部長 前田 健康

歯学科第40期生の皆さん、口腔生命福祉学科第3期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。卒業までの道のりは決して平坦ではなく、苦しいこと、悲しいこと、いろいろとあったでしょうが、すべてを乗り越えて、卒業の日を迎えるに至る努力を続けてきたことに敬意を表すとともに、心よりお喜び申し上げます。また、この日を一日千秋の思いで待ち焦がれていた保護者の皆様にも心からお祝い申し上げます。

卒業生の皆さんは、この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、行政職、大学院生など、さまざまな道に進みます。進む道は各人で異なるものの、歯科医学、歯科医療、口腔保健、社会福祉に携わり国民の健康の維持・増進に寄与するという諸君たちの目標は同一であると思います。

歯科医療をはじめとする医療荒廃が日夜報道されています。日本経済がデフレスパイラルに陥り、一向に出口がみえない中、平成22年度診療報酬改訂のニュースが飛び込んできました。平成22年度の診療報酬全体の改定率が0.19%増と、10年ぶりの引き上げとなる中、歯科診療報酬が2.09%という大幅改訂となりました。歯科界にとって久しぶりの明るいニュースですが、手放しで喜んでばかりはいられません。小泉改革以後、勝ち組、負け組がはっきりとし、その格差は広がっています。格差社会は激しい競争により生み出されてきました。いうまでもなく、現代は競争社会です。競争に勝つには地力をつけなければなりません。今日、卒業の日を迎え、皆さんは社会に羽ばたいていきますが、皆さん方が大学教育で学んだ知識・技能・態度はまだ必要最低限のもので、いわば諸君たちは、今また新たなスタートラインに立ったばかりです。社会は、プロフェッショナルである医療人に対して幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感をもっていることを求めています。これらは今までに受けた教育だけでは不十分で、生涯を通じた

学習、研修によって社会的な地位が得られるものです。諸君たちは共通の目標に向かって、さらなる精進が必要です。そのためには自分をさらにスキルアップするための目標を設定し、これに向かって努力してください。このことは現在の競争社会で生き抜いていくために必要不可欠なことです。

大学も競争社会の中にあります。日本の大学間でも、新潟大学の中でも学部間、研究科間での競争があり、いろいろな評価にさらされています。諸君たちが今日巣立っていく新潟大学歯学部もさまざまな評価を受けています。国立大学法人化以降、予算の獲得にも評価に基づいた競争が行われています。国立大学法人の第1期評価が行われ、平成21年度に中間評価が大学学位授与・評価機構から公表されました。この評価結果によると、新潟大学歯学部は教育、研究の両面で高い評価を受けています (http://www.niad.ac.jp/n_hyouka/kokuritsu/hyoukakekka/kanto_koshinetsu/index.html#36)。全国の国立大学法人歯学部の中でも、新潟大学歯学部は教育、研究設備の整備拡充、教員能力の開発が進んでいる歯学部です。諸君たちが社会に出て、困難な状況に直面したとき、それに対応できる体制が整えられています。困ったときには躊躇することなく、また新潟大学歯学部の門をたたいてください。母校はいつまでたっても母校です。母校はいつまでも君たちを受け入れる寛容があります。

今日卒業の日を迎えるにあたり、歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめ、新潟大学歯学部を卒業したというプライドを持ち、またプロフェッショナルとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。皆さんの今後の活躍を大いに期待しています。



御卒業おめでとうございます

医歯学総合病院副院長 齊 藤 力
(歯科担当)

歯学科第40期生ならびに口腔生命福祉学科第3期生の諸君、またご家族の皆様、この度の卒業誠におめでとうございます。歯学部での課程をすべて修了され、晴れて学士の学位を授与されました。これまでの努力とその成果を讃えますとともに、光り輝く未来に対して心から祝福を申し上げます。

新潟大学歯学部、医歯学総合病院歯科診療部門での学生生活は様々な出来事があったことと思います。歯学祭、歯学部運動会、五十嵐キャンパスや旭町キャンパスで過ごした青春の一頁は、諸君の一生の宝となるはずです。

歯学部歯学科は、従来の「歯」という小領域を中心とした学問の枠組みを見直して歯学を口腔生命科学としてとらえ、これからの歯学界をリードする人材を育成することを目的として教育を行ってきましたが、卒業した諸君は歯科医師国家試験合格すれば直ちに臨床研修歯科医師として大学に附属する病院や厚生労働大臣の指定する病院もしくは診療所で1年間研修施設に勤務し、その後臨床あるいは研究の第一線で、あるいは公衆衛生など歯科医療行政の分野で活躍することとなるでしょう。新潟大学で学んだ知識や技術は歯科医師としての基礎となります。卒業後は、この基礎の上に何を積み重ねていくかが勝負であると思います。現在の歯科界を取り巻く環境は必ずしも明るいものではありませんが、地道に努力を重ねれば必ず素晴らしい未来が切り開けると信じています。歯科医療・歯科医学は日進月歩であり、生涯に渡って学習を継続することを欠かすことができません。保存学、補綴学、口腔外科学などの専門分野を探求することも大切ですが、私たち歯科医師の専門は歯科・歯学であるということも忘れていただきたいと思います。すなわち総合的に顎口腔領域の疾患を予防、治療し、口腔機能を回復させることが歯科医師に求められています。ま

た研究においても歯科医師としての視点を忘れていただきたいと思います。これは臨床研究だけでなく、基礎研究においてもいえます。是非、知的好奇心を失うことなく、一步一步努力を重ねていただきたいと思います。歯学部口腔生命福祉学科は、口腔ケア・摂食嚥下に関する高度な専門知識を有しつつ、保健・医療・福祉を総合的に思考・マネジメントできる専門家を養成し、要介護者、障害者の方々が真に必要な適切な保健医療福祉サービスを総合的に受けられる環境を整備するための人材を育成することを目的としていますが、卒業した皆様は第3期生ということもあり、何かと苦労が多かったことと思います。先輩が少ないということは、さぞかし心細いこともあったかと思えます。口腔生命福祉学科の歴史は先輩の方々とともに皆様が作り上げてきたものであり、そしてこれからもその役割は続きます。卒業後は歯科衛生士あるいは社会福祉士として臨床の現場で、歯科衛生士養成施設の教育現場で、あるいは大学院に進まれて活躍されることと思います。昨今の少子高齢化が急速に進む中で、諸君に求められる要求はますます高まっていくことでしょう。生涯にわたり学ぶ姿勢を持ち続け、ぜひとも後進の指導もできるプロフェッショナルになれることを期待してやみません。

新潟大学歯学部、医歯学総合病院歯科診療部門はその使命として将来、様々な分野でリーダーとして活躍するであろう諸君を全面的に支援します。卒業した後もいつでも門をたたいて下さい。

“学びたい”という意欲に応えていきたいと思えます。十分に実力をつけた諸君が世界に向けて羽ばたかれることを心から期待しています。最後になりますが新潟大学で学ぶ機会を与えていただきましたご家族の皆様にご感謝していただきたいと思います。

卒業にあたって

歯学科6年 坂入 久美子



新潟大学歯学部の学生にとって、卒業の季節は春ではなく秋であるような気がします。ほぼ全ての患者様を後輩に引き継ぎ、第二の家のように感じていた技工室の机を明け渡し、朝と夕方の打刻の義務がなくなると、「ああ、大学生活も終わりだなあ」としみじみ感じてしまいます。

この大学生活の中で一番忙しく、だからこそ一番充実して楽しかった1年間の臨床実習が、10月で終了しました。そんな臨床実習の中でも一番印象的で、10年経っても20年経っても、おそらく一生忘れないであろうという思い出は、何といっても義歯製作でした。

患者様を引き継いで1ヶ月くらい経った日のことでした。担当していた患者様の「入れ歯を作り直したい」の一言で、私の義歯ライフは始まりました。

当時の私はといえば、「本っ当に難しい症例だからね、しっかり勉強してね」と先生が念を押すその症例の、何がそんなに難しいのかも分からないくらいの無知っぷりでした。基本もよく分かっていない私がそんな難しい症例に挑むことは、積み木でマンションを建てるがごとく無謀なことだったと今になって思います。けれど、私にもそれなりに意地というものがあったので「無理なのでやめます」とは言いたくありませんでした。頑張ってみようと思ったのです。

まず、先生に呆られるレベルからは脱しようと、義歯の勉強を始めました。けれど「ローマは1日にしてならず」の言葉の通り、教科書をちよつと読んだからといって知識量が急上昇するなどということはなく、読んでいても「？」マークがあたりどころにも少なくありませんでした。私のあまりの知識のなさに、おそらく先生も「こ

の子大丈夫かな」というレベルを越えて「この子ダメなんじゃないかな」と思っていたに違いありません。それでも根気よく付き合ってくださいました先生には感謝してもしきれません。明日が義歯科の教授審査、という日まで「あなた本当に大丈夫？心配だからちよつと咬合採得の手順言ってみて」と面倒を見てくださり、総合診療部の患者様は神様のように優しい方ばかりだといつも先生方から聞かされていましたが、患者様だけでなく先生も菩薩のようだと思ったものです。

知識量と技工技術というものには間違いなく正の相関があり、そのことから分かるように私の技工技術の方もなかなかのダメっぷりでした。ダメが故に遅く、毎日が提出バツ切との闘いでした。中でも人工歯を配列した時は、朝、登校しては人工歯を並べ、お昼御飯を食べては人工歯を並べ、帰りの打刻をしては人工歯を並べ……昼夜問わず、咬合器をカチカチカチカチ咬ませる音を辺りに響かせ、そうして1日かけて配列した齧義歯を技工士の先生に見ていただくと「まだここが咬んでない」とダメ出しを食らう日々でした。それだけに、技工物のOKが貰えたときはこの世の春と言わんばかりに喜び、また、自分の作った義歯が患者様の口の中に初めて入った時は泣きそうになるほどの感動がありました。

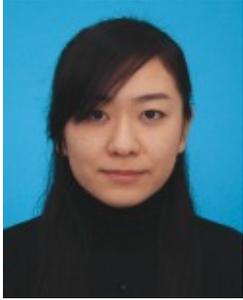
振り返ってみれば自分のダメさが浮き彫りになるような1年間でしたが、諦めずに最後までやり通すことが出来たのは、優しく、ときに厳しく指導して下さった先生方、そして私が落ち込んでいるときに励ましてくれた友人達、そして何より診療の時間が2時間かかっても3時間かかっても、文句ひとつ言わずに「ありがとうございました。次もよろしくね」と笑顔で言って下さった患者様のおかげだと思います。

6年間の大学生活も、これ以上にたくさんの方々に支えられ、初めて成り立っていたものだと思います。今まで私を支えて下さった全ての方々に、この場を借りて御礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科 4年 越田美和



3年生の後期から4年生の臨床実習に備えて、臨床の現場に初めて出てから、あっという間に時が過ぎ、4年目の12月上旬、すべての実習を無事に終えることが出来ました。今は、社会福祉士と歯科衛生士の国家試験に向けての勉強のみとなりました。

4年生はほぼ実習の毎日で、新大病院での歯科衛生士の実習と、社会福祉施設においても社会福祉現場実習として4週間実習をさせていただきました。

社会福祉現場実習では、私は知的障害者授産施設で実習をさせていただきました。知的障害者の方とはあまり深く関わったことがなかったため、最初はどう接すればよいか分からず不安でした。しかし、施設利用者の方から声をかけてきて下さり、利用者の方に逆に助けられました。4週間、利用者の懸命に働く姿や地域で生活する姿を見て、障害者の方が地域で自立して暮らしていくために、私たち地域住民の理解と協力が必要なのだと実感しました。障害者と聞くと、偏見や不安を持ってしまうものですが、実際に接してみると、私たちとなんら変わらない感情を持っていて、みんなそれぞれの個性を持った一人の人間なのだと感じるようになりました。

病院実習では、ほぼすべての診療科を回り、診

療補助や実際の患者様の口腔衛生指導や口腔内清掃等も経験させていただきました。実習が始まった頃は、緊張して挨拶もろくに出来なかったり、今まで勉強してきたことも実際の臨床における治療となると今なにをやっているのか分からなかったり、自分が何をしたらよいのか分からず、治療なさっている先生方や看護師の方々等にご迷惑をおかけしたと思います。しかし、実習が進むうちに、治療の内容が分かるようになり、教科書に書いてあることとリンクするようになってきて、次に何が必要かわかるようになってきました。また、患者様の口腔内の機械的清掃をさせていただいたとき等には、お礼を言ってくださる患者様や、アドバイスを下さる患者様もいて、本当に嬉しかったです。

実習が終わってみると、始まる前は長いと思っていましたが、それぞれの診療科が1週間もしくは2週間の実習で、慣れてきたころに移動を繰り返して、4年生もあっという間に過ぎてしまいました。未熟な私たちのために、指導して下さった先生方や看護師さん、協力して下さった患者様には本当に感謝です。

今まで、歯科と福祉を学んできて、どちらも大切なことを学んできたと思います。私は歯科衛生士として働こうと考えていますが、歯科の領域でも福祉で勉強してきたことは患者様と接する上で重要だと思います。患者様が安心して歯科を受診していただけるような配慮と技術をさらに身につけていきたいと思っています。がしかしその前に、国家試験の勉強です。先輩の成績が良いため、プレッシャーを感じる毎日ですが、出来る限り頑張りたいと思います。